

V 結語

1. 三角形石製品を巡って

第2号住居跡からは、やや風変わりな石製品が出土した。紙幅の都合から本文中で触れることができなかったので、本章であらためて詳述したい。

第2号住居跡の黒浜式土器

まず、問題の土製品を出土した住居跡の時期について簡単に触れておく。

第2号住居跡からは、多量の土器片が出土した。そのいずれもが、縄文時代前期中葉の黒浜式期のものであった。

黒浜式土器については従来多くの編年案が提示されてきたが、近年では全体を3ないし5段階に区分する細別案が定着しつつあるようだ。

第2号住居跡からは、3点の復元個体が出土した。いずれも地文のみの個体であるが、特に胴部から口縁にかけて復元された2個体を軸にして、本住居跡の時期と、抱える問題について簡略に述べてみたい。

1の深鉢は、黒浜式の2式から3式にかけて量を増加させる附加条の縄文が、羽状構成で施文されている。一方で、口端にみられる3単位の刻みは、関山式の口縁突起の系譜を引くものであろう。

2は無節の縄文が施文される土器であるが、胴部全体に縦位回転の縄文を施文した後に、口縁直下のみ横位回転で施文している。

黒浜式において斜方向回転の縄文が、部位によって縦位回転に近づく例は珍しくないが、本個体については明確に施文方向の使い分けを意識しているものとおもわれる。

仮に、口縁直下の横位施文帯を文様帯の表現であると仮定した場合、胴部への縦位施文は、器面を縦位に分割する意図のあらわれとみることができ、例えば肋

骨文系の土器群に顕著に表れるような、器面を上下に貫く文様意匠との関連を指摘することができよう。

以上、2個体の土器はそれぞれに新旧の属性を併せ持っているが、附加条縄文の明らかな存在、さらに、縦位区画・肋骨文系の土器群との連鎖の可能性という2点をもって、3細分案の中段階（5細分案の第3段階目）のものと考えて良いだろう。

破片資料中には、関山式の系譜を引くループ文や整然とした羽状縄文がみられず、文様は素朴な爪形文列や肋骨文が主体で、地文には単節・無節のほか、少量の附加条縄文がみられる。さらに、新段階に特徴的なユニオンジャック風の多帯構成や、無繊維の土器の混在がみられない等、やはり中段階の様相を示している。

なお、第14図34～39には、篋状工具を用いた雨垂れ状の刺突文がみられる。擦痕を残す器壁の類似からも、第1号住居跡出土資料中にみられる貝殻文土器（文蔵式）の“工具違い”とみられる。

三角形石製品

さて、問題の石製品は第15図71に掲載したもので、ここでは三角形石製品と呼ぶ。

非常にバランスのとれた二等辺三角形で、3頂点はいずれも丸みを帯び、これをつなぐ3辺はそれぞれ緩やかな外向きの弧を描く。天地5.7cm、左右4.6cm、厚さ7mmを測る。側面観は中央部で最も厚く、頂点に近づくにしたがって徐々に薄くなっている。側縁はやや丸みを帯びた整形がなされており、断面は三味線胴状を呈する。

表裏および側面に擦痕が観察されるが、それ以外に文様と呼べるものはみられない。

敲打や、特定の部分が著しく摩滅する等の使用痕がみられないため、いわゆる磨石とは性格を異にするものと考えられる。

石材はシルト質泥岩であり、多孔質で軽く、かつ軟質である。

すでに述べたように第2号住居跡出土の土器は、大半が黒浜式中段階のものであり、本資料もまた同時期のものと考えられる。

「肩パッド型」岩偶

さて、この石製品はその単純素朴な造作とはうらはらに、周辺地域には類例を見出しがたい。そこで、二等辺三角形・断面三味線胴という形状をもとに視野を広げた場合、同時期の円筒下層式分布域を中心に盛行する一種の岩偶との類似が指摘できる。

この岩偶とは、凝灰岩・泥岩・シルト岩などのやや軟質な石材を用いて、重心が一端に寄った菱形をかたちづくるものである。

左右の最大幅の部分に、内側に折り返した両腕らしき表現がみられるのが特徴で、頭部が瘤状に表現されることもあるが、顔面や乳房の表現は基本的にみられない。

この種の岩偶については、古くは村越潔氏がその存在を指摘し、さらに稲野祐介氏はこれを「肩パッド型の岩偶」と呼んで、一連の論考でその形態と大きさからバリエーションと地域性の抽出を行っている。

時期は円筒下層a～上層a式期とされる例が存在するが、前期末葉（円筒下層d式期）に集中するとされる。分布は、秋田県米代川上流域・青森県岩木川上流域に集中するほか、北海道渡島半島にまで散発的に分布する。大木式文化圏には希薄とされるが、江坂輝彌氏が提示された岩手県二日市貝塚例など、「肩パッド」ではないまでも両腕の表現を持つものを射程に入れれば、その分布はさらに広がるものと考えられる。

「肩パッド型」出現の背景には、挾状耳飾や、ある種の磨製石斧に代表される、一連の擦切り石器の盛行が存在する。これは、凝灰岩・泥岩をはじめとする軟質の石材を短冊または扇状に切り分けて素材とするもので、特にこの時期の東北地方北部の日本海側では顕著にみられ、秋田県上ノ山遺跡の前期後葉の集落跡からは、燕尾型・カツオブシ型など、この種の石製品が

数多く出土している。

技法の性質上、出来上がる製品のプロポーションは長方形、紡錘形、二等辺三角形、縦長の台形等が主体となる。

「肩パッド型」もまた、この製作技法にもとづいた人体表現であると考えられる。青森県大平遺跡、熊沢遺跡等の資料にみられる正中線と、つまさきへと収斂する放射状の沈線は、擦切り手法における素材分割手法との関連をうかがわせる。これは同時期の土偶には見出しがたい特徴であり、逆にこれが中期以降の土偶の体部文様を規定した可能性すら疑われる。

なお、「肩パッド型」にみられる腕状表現や、かならず上下一対となる頭部・足部の突起表現は一種の紐かけであろう。腕状表現の上下がスリットになる例がみられる点、頭部と足部の突起が常に対の状態で作形される点、腕状表現が線刻化する実平例が明確に頭部・足部突起を持っている点からみても、この種の岩偶は紐で括って吊り下げることが前提として製作されたものであって、この特質は両肩や後頭部に貫通孔をもつ中期～後期の土偶へと受け継がれてゆくものと考えられる。

「無突起・無孔型」と三角形土製品

北海道では「肩パッド型」とほぼ時を同じくして、三角形石製品が出現する。古くは円筒下層a・b式期にみられ、以降中期まで盛んに製作される。

「肩パッド型」と同時に出土することも多く、凝灰岩・泥岩等軟質の石材を用いる点も類似する。形態は隅丸の二等辺三角形で、頭部・両腕等一切の表現を排除する。ただし、中期には首・肩部に小突起を配するものや、肩部に一对の貫通孔を穿つ例も現れる。

また、前期段階には中央のくびれた分銅形の石製品が伴うことがあるが、これは紐で括って吊り下げることが目的としたものか、あるいは、東北地方のバイオリン形の土偶を模したものとも考えられよう。

北海道における三角形石製品、とりわけ「無突起・無孔型」のそれは、「肩パッド型」から、その用途に関わる「吊り下げ」という性質を削除したものであり、

形態的には中尾緑島遺跡のものに最も近いが、東北地方以南における分布が明確でない。

円筒土器文化圏の「肩パッド型」には、小型で長楕円形かつ有頭の、いわゆる男根状石製品に類似のものが伴うが、明確に二等辺三角形かつ無文の石製品が伴う例はみられない。あれほど多用な石製品を出土した上ノ山II遺跡ですら、これと同様のものは出土していない。

本州における前期の岩偶が、あくまで“吊り下げ”にこだわったことがわかると同時に、中尾緑島例が、北海道のものと同様に“吊り下げ”のための措置を持たなかったことの理由づけが問題となろう。

なお、類似のものとして、東北地方中期～後期には三角形土製品（三角形土版）が存在する。時期的には大木7b～8b期に特に集中し、地域的にも北は北海道、南は福島・新潟県域にまで広く展開する。阿部明彦氏の集成によれば、日本海側により多く出土するようである。大木式の伸張に併行するとの指摘もある。

正三角形で、突起や貫通孔を持たず、3辺が内寄りの弧を描く、背面にむかって反り返るなど、前期段階

の一連の資料とは微妙な違いをみせるが、その唐突な出現振りからも、北海道における「肩パッド型」の異系列である三角形石製品が本州に逆輸入されたものとも考えられようか。

文化的系譜としての擦切り石器

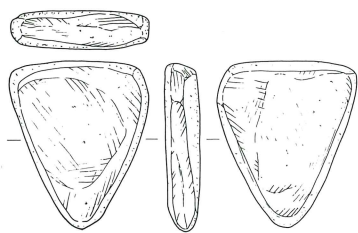
田中英司氏は、縄文前期関山式期に出現する挟入尖頭器の分析を通じ、狩猟活動の主体たる成人男子を担い手とした「挟入意匠」の文化の広域展開を想定された。

今回とりあげた擦切り技法もまた、前期後半を中心とした限られた時期に土器形式圏横断的な展開をみせる注目すべき文化要素であり、挟状耳飾はその象徴といえる。

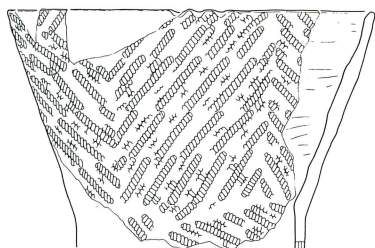
今回の調査では、上記の三角形石製品以外に、円筒土器文化圏との直接的な交流を示す要素を指摘することはできなかった。

しかし、大宮台地の南端にあって、この種の特異な石製品が出土したことは、この地域における考古資料の解釈に、ある種の注意を喚起するものといえるだろう。

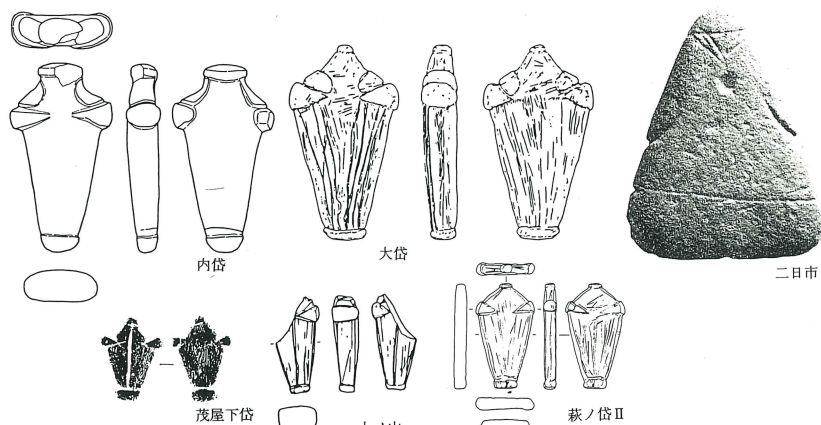
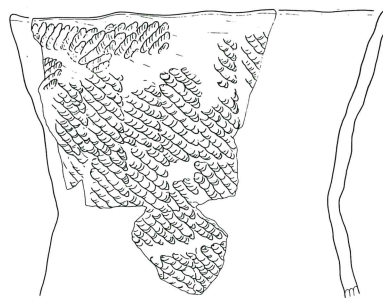
第28図 参考図版



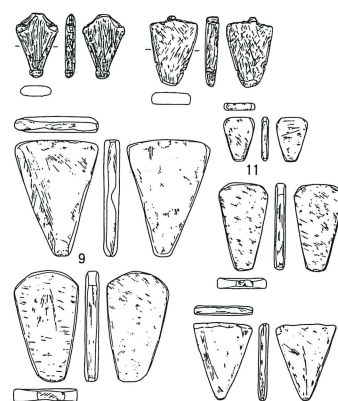
第2号住居跡出土三角形石製品 (S=1/3)



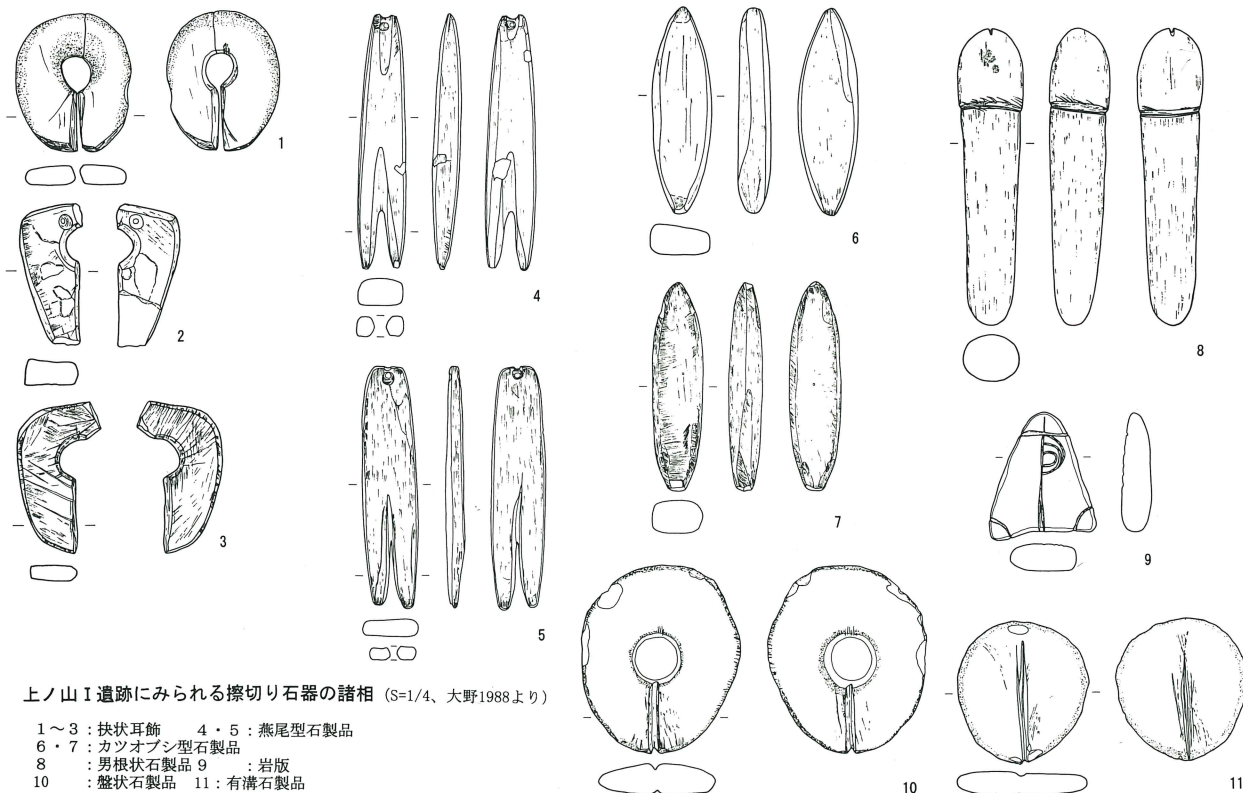
第2号住居跡出土土器 (S=1/6)



「肩パッド型岩偶」(S=1/6、稲野1994・江坂1984より)



北海道の三角形石製品 (S=1/6、長沼1998より)



上ノ山I遺跡にみられる擦切り石器の諸相 (S=1/4、大野1988より)

- 1~3: 扶杖耳飾 4・5: 燕尾型石製品
6・7: カンオプシ型石製品
8: 男根状石製品 9: 岩版
10: 盤状石製品 11: 有溝石製品

参考文献一覧

- | | | |
|-----------|--------------------------------|------------------------------|
| 阿部明彦 | 1994 「三角形土製品について」 | 土偶シンポジウム 2 「東北北海道の土偶 I」 発表要旨 |
| 新井和之 | 1999 「関東地方 前期 (黒浜式)」 | 『縄文時代』10 |
| 石岡憲雄 | 1999 「東北地方 前期 (円筒下層式)」 | 『縄文時代』10 |
| 稲野祐介 | 1999 「遺物研究 岩偶」 | 『縄文時代』10 |
| 稲野祐介 | 1996 「円筒土器に伴う岩偶(2)」 | 『土偶研究の地平 1』 |
| 稲野祐介 | 1993 「円筒土器に伴う岩偶(1)」 | 考古学ジャーナル362 |
| 稲野祐介 | 1994 「岩偶」 | 土偶シンポジウム 2 「東北北海道の土偶 I」 発表要旨 |
| 江坂輝彌他 | 1984 『土偶芸術と信仰』 | 『古代史発掘』3 |
| 大野憲司他 | 1988 『上ノ山 I 遺跡・館野遺跡・上ノ山 II 遺跡』 | 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 II |
| 小笠原雅行 | 1998 「三内丸山遺跡 IX」 | 青森県埋蔵文化財調査報告書 第249集 |
| 小笠原雅行 | 1998 「三内丸山遺跡 X」 | 青森県埋蔵文化財調査報告書 第250集 |
| 奥野麦生 | 1989 「黒浜式土器の系統性とその変遷」 | 『土曜考古』13 |
| 奥野麦生・小宮雪春 | 1999 「縄文時代前期の土器の諸相」 | 『埼葛の縄文前期』埼葛地区文化財担当学会報告書 第3集 |
| 金子直行他 | 1990 「シンポジウム 大木、有尾、そして黒浜」 | 『埼玉考古』別冊3 |
| 金子直行 | 1990 『八木上遺跡』 | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第91集 |
| 黒坂禎二他 | 1992 「山之内清男考古資料 3 上福岡貝塚資料」 | 『奈良国立文化財研究所史料 第33冊』 |
| 櫻田 隆 | 1999 「池内遺跡」 | 秋田県文化財調査報告書 第282集 |
| 高原勇夫 | 1985 「大宮台地南部及び周辺低地の地層区分と堆積環境」 | 『浦和市史』調査報告書第17集 自然編 |
| 田中英司 | 1995 「挟入意匠の石器文化」 | 『物質文化』59 |
| 長沼 孝 | 1998 「北海道の土偶」 | 『土偶研究の地平 3』 |
| 堀口萬吉他 | 1986 『新編埼玉県史』別編 3 自然 | |
| 村越 潔 | 1974 『円筒土器文化』 | 雄山閣考古学選書10 |